扶桑略記

日利9
797

松象記

佐藤直方

全

ロ31/9
797

松さか枝

新古今集ニ

ちらぬとふに松の枝かはる人の小夜衣
袖つらねし思ひそめにかさねてそ

松は千年の霜にも色をかへず常盤にいひならべたる松の枝
わさなるにまして女のすがたたるみさをふかく
いにしへ貴からんさまをなきたる例へしらまく女の道八
我身をたてぬつまの縁かさぬることは貞女
二夫をまみへずといふ人のことばも侍るぞかしもろ
こしよ姚玉京といひしはたんなに十六歳にて男
に死わかれは父母あはれみて又よき男にあはせ
んとせしかどもきはめて貞女の道おうしなはん

[illegible]

[illegible]

[illegible]

京詩[illegible]

昔時無偶去　今年還獨歸
古人恩既重　不忍更雙飛

我のうへにうるはしてさて今年かへりくるとうのつるとはおもはの秋はひなくこまいはふつたえ先のともをもとりかへりてそのあるいつるをかりの古人はんなてふれたりはふさひとるをそのひとりかはをはふりふ男乃れんあひ深くおりられあるさえくあを男よつまあるはいとをへうこいはいはいはいへくなるひをそのひをはいつを謝よ貞女乃ひさるはを蕙もかんしはををはいをとりてをにををはをんや

○堀川乃院の御とき文合に中納言俊忠
　人しれぬ思ひありその浦風に
　なみのよるこそいはまほしけれ
といひやり侍るかへし　女一宮紀伊
　音にきくたかしの濱乃あだ波は
　かけじや袖のぬれもこそすれ
女の道にかなしきは人を親るやうにこそ滿るなひて
縁に付侍らはさんとくに法になりあひそ侍
なんぞわかもなく家仕して何かん人なとは色
かれわらは人くいひに執筆ありて太かさかん
こゝろやすきこの縁くしてなとひまゆ侍の滿し紀
まさまにし然

○新た濃やの中の女房に思ひよるたよ外に
いてあへなかいひ侍りけれハ
　まこの浦をたちいくぬともおほえん
　あさこえわかる旅の夜の夢しなまま
とまみく侍り天下皆とやれは女房にあるたゆたこ
このあらとやれはいやしめり執行節彼おとよ
乃きやとよ思まもたちぬ今いまうちそけ給へて
といひ侍りあれハ
　侍らてたた岩間乃みづをまたれ物給
　いかに中なさんとて思ふらん
かくよて後に名りれやなん当時乃きんかれ
ふは春乃手をよちいりてなひまたさくりなを

かすともかゝるとこゝに岩戸のかゝりたるなとの面白
ふるりのそんなれそうこ面さしく我行れを
んかゝかゝ身をそりへまきう
○周防の国侍二條乃院ゆく春の東より松りの紅
ゆくえのひやうゆいの紙きして大納言家ゆれを
まくゝふゆして 腕を簾の下よりさしよ勢伯
見それへ

春乃東北美とうを新手松竹
うひなくたんゝ松たれ
とうゝゝりゝ見へゝふ
ちりのうて春乃東深さ手松を

いゝかひあく美竹あり乃面白
ひうの人ゝかゝをそ見乃あうふまをを歌をゝ
ゆゆ竹ゝりかくうゝへまはゆふよ面ゝうなる
松ゝゝゝうはみさなくゝまてかゝゝうう
紀名紙ゝ伯る面白ゝ面ゝ面ゝ
なゝうさゝ我尚附の人なゝは竹をゝ讀まく
いゝふいゝひゝ松みゝてなまくゝ紀雅て
伯んさやうふゝうゝおさゝ言の東北ちをなの
なゝ紀世ゝゝいあさなゝひあまは竹竹媛
物の姫とはありもの竹るまゝ松
○ゝうゝ女の狐ゝゝかゝらのゝゝゝゝもる紀
ゝ伯ゝのゝすゝとゝ乃まん人を紙乃宮てゝく

さうに持へな事ゐりかやゐ何ものハ宗旨の
とうゐていうゐをくせよ仕をて身をあき
免侍りへなを申さ里のうなる新家ゑ行まうふ
女子（をんなこ）ゐさ新男のさう海りさるを新くゐ侍ふれ
うを人く者さうし毋ゐよ川ゑとしておのつう
女の知をうう川ゐを流うるゑうふゐを云ひ
立川を立てハ根坂者へる新う紀草乃やうにうふ
のうをなく所坂角ゐるゐ亟紀ゐうを新りを添
氏相流よゐく乃入道の娘ゑとりかつゐ侍る
ゐて我いをくあんかをゑ行りゐるゐ新
幸を知さいて父乃大臣ゐるゐ むゐの知う
ゐをもてうさうしてむゐをいひうゐるゐ紀世ゐ

さすくゐゐをせはゐを里おうん娘ハ身をなゐをても
失を侍り神と侍ゐゑ娘よいさめ亟侍をしに
ゐして光源氏よゐひををて知くの中文とう
みゐのくすふいう紀幸坂知をいく侍ゐくと
坂紫式部の書ゐう竹（侍るも世の人出ゐ知つう
ひのいゐ光と見ゐ乃侍ふゐや平中眞（おうき）の娘いをい
うふかり侍ゐくみゐに和ゐ者ゐ侍んゐとおりひ
うふを祝ゐくなをうを娘とくおちふをつ人の
國ゐをうゐ紀而ゑ位者坂坂知ゐを里うりて平兼

盧

おちゐのう人めまれゐふ山星ゑ
家居せんとはおりひこゐや君

とよりて有りよりあめもあれふそは此女は
世にかくさ新人より淨義大徳と名乃立る
事なりやてはやのあるー世よりもよりぬ事な
るを世れハかの家住の本いとも受けて作りしとそ
此女子陽ゝ法師より血とよ習てなる紀世のて
じ故諸ゝ人ゝ作りいめちきなくそ川う
かゝ人なるとにて我作世千載集ゆ山寺にあを
つゝ作りるるそ紀ゝ世を女のもハゝ作うハ
世れハ空京法師

おそろしや未首乃うけちの九末稿
あゝみれるひよおちぬ夏紀う那
かやうにそゝ紀ゝ世て人まもいひさそれ未乃

代まも書法ゝさえらまん事ハ行おるるりる
ゝ世は後の世れ紀ゝよりて女房なるる
法師より通つなる作るまゝ紀ゝ海て童まもへゝ
○かゝ聖の歩将乃娘右近ある男のゝすまゝ
よ源川の事を魚ゝちうひゝ世とゝすれよ世れ
後ゆいひ有りる

つゝゝ新ゝ為をは思ハたちひて
人乃命ハ行おるるを何れうる

女の行ゆよ京ゝ新ゝハいゝくうるゝ女ゝ京
作ゝへなる紀是をはうゝみひて行を人の命ハ
ちゝむるゝ何ゝれゆゝ紀ゝ世を野ゝ人へまる
ある事ゆ

いつれも思ひあひしを今はしに
たゝ頼しら我かうきは色好まん
是故ある故男なからの深くも愛せさせすゝに
捨てやしぬをあいきのこゝろ故女あとの色まて
よろこぶなるへしたゝんあきかく彦にくふにくかり
て男子すらさ故かとぬすに女性なりと皆
いふへしまた定めんあひ侍りしやうなに称ちけ公
あやまちといてあれ清う思へとし侍らんへの一つ
てら紀婦の積ぬへし
○柿本のくら免まあとは國王大臣をもあまた
ほかにいそんやうちあに清きにおかれてもやまち
ましはものかぬ女らあつぬ本とら紀世のなきひそと

思ひあしく何事をも清のこゝろく称くうむまし
なあとなりいふとなるはわか道理とおりはん
あとふを相違なく云ふ事もあるて又ひとの
清さしをいひしたう努清きこゝろの中ふ
もいつりきこく清を称紀との道なしひあれ
ハまからぬ故ふ称ら紀事をさ故やうなく我ハあるう
免とゐ心出ふたあひるくきゝんハら称りたち
たんよ云をも中くへ言をも川うしくいとたしく覚
あ画紀をいひてもかひあさりの女へ折すゝあ
くいひ乃ともいひても侍りてそれへてふく清進そる
画し

○小野小町の云前し

花のさはうの月ふりぬるつゆ
ことの葉世よふるあめせしの日に
人のさをとゝふ色のをかさをきて袖なくれぬ
ろゝふる世乃なゝひあれいまゝていと海あれとも
ふよ浦川の藝能和歌絵ふ紙うけ伝へいる
けゝる月日拙筆乃へうゝをこ我
○菅家ゑいあるゝ勢ひるる時とゝや
うゝ月をしやゝ屋にも似る新梅乃ゑ
あふうかわ月をけ者ゝ新
いもうゝ月をしくゝ月ゝ新ゝ屋しゝ
女の者さゝ乃具は朝夕たゝ者ゝ伝へなり
さをゝてあふみの君此屋にとゝふものあゝ

ゝにかひけ者てゆゝ人ゝ伝たゝ物者ゝ先居
新人をゝいひ者新やゝに者ゝ者ぬをけ者た
ゝゝ者ゝ新半紙よしとはいへゝんすへゝ行ゝ
を平生にゝゝ者ゝて俄ふ目ゝゝぬやゝに
ゝ物ゝ者ゝ者ゝ大ゝ見ゝゝを加ゝゝ
いゝなゝの髪ゝ伸てて紙すれ者へぬゝくのゝは
ゝゝ新ゝ者ゝ白粉ゝゝ口屋にのてゝ加
屋者ゝ者ゝ人ふ者ゝんゝて俄ゝけゝゝ
ゝゝゝゝ者ゝ屋ふ爪ゝを者ゝ者ひのゝ紀ゝを
ゝ月ゝ者ゝなゝ新ゝ屋にいゝゝゝゝ新
ハむゝ伝者ゝゝ人ゝゝを見へ伝ゝをゝすゝ乃河
者ゝを異なゝを只人形者ゝゝゝゝゝふやゝ

まていとさびまゝ〜ゝ
を見わ紀紀乃宇我身をそゝひ侍るへし
○此新宮の侍ぬしに紀国
るをとゝ紀殿上人うれまんてゆやあくれよりん
夕巻のかとにちらさ紀出給すむ〜を入
て紫乃落やうに色ゝく萩の花すさ〜てさる
面影とゝろの名の色紀野させくさ〜おも
りふを色ゝ書付ゝ
ちる乃らちり花の白ひ紀すむ〜の
青ゝ紀ゝ乃ゝ乃は学ふるをへな
選子内親王乃返し
いろ〜の花をさうた白ふをを

此ふの風乃をふのゝさゝめ
舟院なゝのおもひもうけぬ物をよさへゝまれ
ゆ先〜侍ま日は女ゝいゝふを花くふるを三て加ろ
くゝ見人ゝ有ゝ
泡行露豈不夙夜謂行多露とゝん厭泡とは
う野ふ乃也不夙夜とはをんゝの紀ゝく兼姫
くゝゝと紀ゝを紀のゝ
女ゝかく道乃露行ゝ
ちゝを紀ゝりゝを紀ゝ
なゝに紀ゝ
不ゝ

○夜の見す海ゝくゝ
ゝ

いひろふ女あまをりるうれさちり新日長東しを海
ふくふさをりをりをは神ゝ記ゝ公やふるさをく夜を
をうゝ月紙宿草の神をいてあしりふを河
あおとこ為りてすれ東いさりまてまてゝ
さをりよし中男れハ神ゝ記をたへ思ひ津ちう
ぬ紙あてをもかくもいきて的くよんふ

佐の月のりを嶽為りをふ今青紙

あをやあをゝ川ゝ発あるん

れとこ代おをきてくあるれるやおのひあん外
あ詠う為佐りき神ゝ記をゝ思ひなゝふ
佐ゝ為へふれとこあるひあるくおのひをへをいふを
女を神ゝ記ゝふ為も世乃まゝ記事まて

も事へ為ふへなあをゝ我佐也

○下野乃國あり名新女ゝをゝあんをひりふ
男ふ詠ゝりてを為影ふおゝをれ乃奥ともを
皆ゝ記ゝをひ佐ゝ為ゝ後ゝ求為新をん
乃ゝ女に為ゝこひりふゝをゝ女れをゝの
馬紙新ゝのをんゝ強ゝ為ゝ新を又ゝの男れを
ひりふをゝをゝ佐ゝ為ゝをいふゝのをおこせくを
百ふをゝをゝ新ゝ附女佐ゝ為ゝ今ゝりハをや
るんゝもあゝはゝへをゝたゝしゝあをゝひりを
佐ゝをいゝくゝまゝれゝん敵ハおをせひゝもゝふ
らい佐ゝへおをいひりふゝ女をゝへ敵ゝ云佐せ
まゝき紙佐ゝへるんやみををまゝをゝたりゝも

中〳〵ものゝふ共拾ひ集めて
わらいひけるつゝ作り祝といひあくめて
ふ祝をいはぬ時もなへ〳〵今よりは
うゑ世乃中ぞいとくわるしん
此中野とをゝ〳〵百姓ばかりもあと集の
ゝく男よつゝ〳〵新ふたゝび関くいとあそれと
思ひて道具をもとひ返してむ〳〵のまたすゝ
作りとゝん
○河新男お妻をおさゝるゝとあひそゝく
ゝ〳〵新平秋の夜れ作〳〵やゝ鹿の名
拾ふ者作るゝと紀ゝ中のめよ作ゝやとひ
れいかゝの如れよれふ

我を麻為紀て拾ゝ人中あひ〳〵ゝ
今ゝよりそれ声のゝ無ゝ中
とよゝて作ゝはれとゝゝ作ゝ百姓ゝ思ひて
今の女を送ゝゝふの如と作ふ家さゝゝ
おとゝのふゝ思ゝ大ゝ一ゝん乃とゝりあ
ゝ一ゝ河ゝはいふも拾おひ入ゝ新ゝ作ゝ
祝ゝよ思ゝとも中〳〵無ひれゝ大切よ思ゝ
おゝつゝ男拾ひゝ河ゝ作ゝなひゝりあゝ家に
いゝ〳〵乃聖中れ作ゝ無ふれと
りゝの中ゝ作ゝ新ゝ人ゝ汲
世弄能因ゝ弄拾ゝ世中の作ゝはりゝの
如ないゝとゝん人ゝより思ゝゝゝ人弄ゝく一度

をかれてゐる中なりともとゝまるべき歟
ぬ色紙かゝりたるひとあひたる事歟よしみ
いとゝすゝむかさねたるのゐれハ修行所にてゆいを
紫れなるひを讀る音あるへしこの歟とりを
見るふつゝかゝを女はゐ色紙をうゝ記やうゐある
海ゝさゝのあり

○所歟にとゝまるの部ふまゝ部ゝ色紙ゝ
なるにかゝるゝなゝ色ゝかゝく讀まゝ所ゝ名ん事あ
ひくゝあるひも歟ゝ世の中にある事よ中ゝ
ゝりゝは見往讀まゝ記すまひまくハ侍ゝ
しゝのをゝ中れハ男

ゝとりのゝ年五ゝ記ゝ

とゝ侍ゝ歟男の色ひゝ面ゝ所ゝれよゝ世
侍ゝ言記もいや記ゝ女は男ゝ扶持せゝれ
てゝ面ゝかくゝまひすゝてゝとゝ記ゝ
面色侍ゝいゝ讀まゝ記事なり公家の人ゝ
無君ゝ侍ゝ萩の戸所ゝ面ゝれハ出入る家
ま袖にゝ歟ゝあるひハ関ゝおゝなたま
の月ゝ雲れゝ所ゝ記ゝあるひハ侍神樂せゝ
名乃さもよ雲表をゝの記武士ゝ侍殿ゝのゝ
ねをゝたゝ面ゝ西樓ゝ月のおゝゝれまて
夜語をゝゝ世宿ゝ二ゝ事修ゝ出ゝ詠を
のへ侍ゝ面ひなゝ小女世家のゝゝ有ゝ

主男をもあくさ免はしてう紀世のまうるひの
うるつぬとふかゝ帝皇紀事おとゝませ
く名なきそとひあるあくゐたうちるう皆石つ
ふゝのをとゝ多な免腰乃ゐ川まに八物紙
并ゝ引さくまる小袖紙しうゝ伝るう老
をうふはるあく伝ゝ重かやゝれ仙ゝ乃ゝ乳女は
まつゝな時ゝいつゝ及ゐゝいふ富はうゝ乳象よ
伝るもいてうおさ免なゝ伝るへなされハたとゝ
ゝもうゝみてゝ重つくゝ川うゝ身をゝ川うめ
うゝ紀名紙流し伝るへゝ色を仙乃やゝるゐれ
身の者はゝひまゝ乳ゝなれ事るれハかゝ
命ゝ乳ゝ見つゝ重なゝゝたゝう

○迎紀須ゝや築紫そたんゝの除ゝ人時うの
ゝ重ゝゝうゝくむゝのやゝにをあゝすおゝうゝは
ゐれハ河ハゝをゝ乳友ゝをゝのいはたんゝをゝ
乳人をゝのゝく築紫へ下を伝ゝ乳乳ゝ京ま
強ゝ重ゝ乳はゝす家ゝまつゝゝれたかゝあゝ人ハ
くゝとくゝ乳つくゝ紙ひゝ子ゝ紙をゝて伝ゝ乳ゝれ
いゝ紙ゝ便ゝても男のゝ重ゝはゝくゝ重なゝと朝夕
伝ゝをゝ乳ゝ乳ゝ折ゝ名築紫ゝ乳ゝ毎ゝおこせゝれハ恨
ひくゝ紙毎紙ゝ乳ゝに重京のゝんゝおゝりひゝやゝて
ゝ乳ゝ紙ゝ乳ゝ乳ゝを書はくゝゝゝくゝゝいゝ絡あま
ゝ重ゝ外をゝゝ乳ゝくゝの紙紙おひゝくゝゝのゝ
をゝ紙書はくゝゝ乳ゝ重ハいゝ婚ゝゝて於

讀てはかくこそやらまほしけ
れ世をあるべき事をかき侍りぬ此外を新よ
あてくるくれりのやうに此外のまゝに
ひのくれさこそのかなしかりけれ侍りく思ひ侍りをあめと
涙ぞふる人はなかるのこてくるを侍りの初の世事なる
世はいとくはかなかるものかるもおくるへなとおの
くるまてひのそれふいるこれをかるをて流なるく
よ過るりをかき書くるふ奥に

あてはかくこそ侍るをもれ偏は
たゝ涙とよりをしかりなる
とゝ讀くるこたをもそたくくよ侍るて侍るとし
るくくふやくくこ侍るをんいそ南時の

とんなくはさやうれあるひやりもあるて恨の数く
書をくくはるくるれかるれ世ぬ物紙のはをそよ侍る
半と腹をたにそあるれ面るんまらの女れをへ
くくれをるくくるくはる侍をこ家とみ業くくを
とるる月の恋を記かをは誰くもをくれくく恨
いるはあいひもあるてすくくをのなをと世おを
涙へくありるる歌侍はくくれ涙の人乃
をさくをを見へ侍れ大くるの世乃友くちのまを
君と居下れ中も世のくる記時かなりてなをも
むくれをくくをかえをうやまひをあくをあへ
くくれ涙をやふれるくくまれをき半の中まもいを
せ乃中ををとくかるるのおくくへの物をを

むつまじきあいれいあるべき事なり翠帳紅閨
乃ち世に新枕世に後朝と俗花園宮の御ゝひと色
後世の者く歌を詠ずるゝみのあそれまでなり
うたもうまくきこえてきこえずとのたまうすべもな
やこのたとえ詠へよりて秋花の葉と色うつり色褪
色のちくさを加へ色〳〵よりあつまれんとまいくあち
紀なくまさるくいあるひあるいはなりあまはは
世の人まもとうとあるべく天地の御光くさまという
てうかなひ侍りんかの朱買ひはすのたまうり
しあめ〳〵誰も見つあるべき色さまなりむし〳〵
孟光といひしるる女はをあつのまあるべきあん
といひしるの妻あるべしたよ紀人の娘なりそれと

女の道は能きてくるる女まく男のまあるべきあん
覇陵といふあるは世は世のまはしふとまるひて
をうたうり田をうへしに茶は州又きまはたるべきを
織あるとうへをぞうるぬそるべとしあるる時を書を
讀琴は志〳〵あるべしあそひつて世の富貴をを
すまを居るまを援金智といふ朋よりて人ふ
あるとうれはるすつまなをすあるはいとれをて
いとあやうふ命なる有根まてあるりつるまて
もなはいさうを男ふはうある礼義を失ひまあ
をくあん小食をすむるとて八腊を言く義上
はく拾仕し肩はそ
うをり新とあん

○むかしより班婕妤といひ奇なる女を漢乃
孝成皇帝ゆゑ中にみとよ思せ給ふ勢し
ふあると記みて花園に於ひせさ勢給ふと爲て
班婕妤と同じ車に乗て御幸し給ふよのひれ
は班婕妤申けやう婦る我絵苫紙あと紙に作る
よかゝ為聖王を皆〳〵名言記給下紙乃をかる
をふおかせ給ふ車未の世れよ〳〵ぬ君し我を女
るを紙石をし給ふとん〳〵作れ紙に今紙あを
かゝ車紙同じくせさ勢給ふんとおゝ〳〵是
よ似て作るうとゆを是は孝成皇帝我の云給ふ
と感して其事紙ら〳〵海を給へ皇帝乃御母大
きゝんの乃きゝゆよ〳〵をさゝ為て知ひいよ婕

妤ふ給ふひせさ勢給へをとゝあんされハ女のれとと
ふあいせ〳〵新〳〵事を紙ゆとにをゝひて作るへし
すへて女乃るれ故ゆ〳〵世紙ゆ〳〵ふひめき名ゆ
へし世為ゆ為ゆ作るなれハ男もをんゆをゆ〳〵
作〳〵しゝ思ふ為なりり

○典侍蚩子（ないしのすけなをいこ）のよ為ふ

ひのすれかふふをふすむ虫のを思うと
祐紙て我なるめ世をはうみ

とゆんよゆ乃れ世かくをゆゆうかゝゝふ思ひ
とを作るゝ世をうゝ為ゆふゆをゝ海きたを
されいゝのゝみを紙女乃人よ人をたゆゝて
世為ゆすくなくれん孔子の家語といふものよ女

の去る道七つありうちありそねみするとすれ
たとひ身を損ぬまでも姑と口のはなはだしとおもはれ
るゆゑ子のなきとかしましき病のことなり此七つの
中にもそねみありそねむとは男の人とせまりなる
こと又ある歌に

うしと見ぬをはつらくそおもひしられ
そのむかし我のなきとおもひしは

とも讀書根をよくして其人を友とす顔回左丘
明なとの聖人と孔子も宣へし此ら理をしらむ
るとうるさきとのみすへてにおもひくはしう
ひたるへしさんは女子も体陰にし家風たちう
めへ女子のありかたは見る目のうちもうし風ら

にいふ去状をもらはらへくあさゆふの立居につきて
てもちことなくすきなきはなまひ芸もあるは
しれなり日夕父母には孝行なして此限りは
のふまゆる人親のことに随ひて道にかやま
あまへてもみをいふてつゝふみを得しはしぬきてれ
とこの家にいるとも必すもさし出してある
事とも多かる人親には従ふ時に能々身を除く
しまて第に幸もぬ織いをなすことをなくし
後仕ふとそいへは其身まて男性の行くありなりし
みもいかに甚た必後の心まてたとふにも申し侍
らん世の中まゝめそ中はまりかとは思ひ

よ先の如くなる事を行ふ紀うまるわさをする人へ
しまうとあハ亦子をふむうの母妻なれハいうくこの
は先よりも娘なるこを伝ふへなる只我娘とそ
思ひくむ人へ伝へあともよめ其男の色ヲ乃
ひとくなる先けなる娘振舞ともたりくを見世伝
ふくうふをの川をよりを海ふ歩めく
いくを紀伝るそう彼るをいこれとのそ乃ひく
つを見うと思ひなるて和とへヲ為なるめ
てよ為川ヲ娘ふ氣色なくまを先やふ何
ふを伝へは之をめをもいるを乃ちうとめう
ちるなくにく夢ふいひるを見なすを色を
とひ其ふうと先乃あるうちふ祝ちをふ乃

中性ありてなるもてにう乃紀ふるまいをし
伝ふとても我男の祝ふあを思いうはせん
とふもかくまを為紀ふ為随ひていよく世をは
恨うをのを紀ふはをしをて伝へしを家ふる
紀うへまはたとひうをりるをにらをあうぬい
ゆ男の中為え伝るやくもよあ乃恥とはいふ
色うくにむすふ奚ヲのはるうしふ紀ハと
思ひなを伝ふんくに紀はやをく伝へしを我
とうをくふとめををさうひてをあくた
とふを随ハに祝をいうをなとせんヲすく
せもうかく為終ヲををを伝ふハ祝ヲ
むうんなりての恥人ヲいうをん云集の求い

くみていはれ甲斐を待つんさまたゝ恨
をかくさねおもへふかきうらみ加のもく哀乃志和
はるめふすへくよろ川乃事なるさらふえんを
愛さ事をも見ぬきふかのめうゝ
むへくんゆをもふくかゝぬさふかをあるさふ
恨れまつさかそれをもまりぬへゝおなくハ哀
出くろもまんくおさふもをへゝとい宜ハ
ろんすへき事とは怨乃字まて恨るとなを
ほのめうゝをはすをなゝぬやうにわれうれ
いひおるさなりかやうにうむへき事をう
らむるとてもうゝ恨くにくかゝぬやうまいひ出れ
ぬとへおふ女なゝはおとゝもをゝをゝを感して

おのれと思ふ心も増りをゝ愛よう川乃ふんをある
まふへゝとおもをかの源氏物語乃紫ゝ上の有様
をゝを女乃をゝ為なりをは世上の人ゝ乃為
らゝ笑んらく紫式部乃書おをふぬへゝ

○仲哀天皇乃をゝ紀神功皇后應神天皇誠
をゝをゝ御ゝ御なゝ新羅百濟高麗をゝち
隆へ天の下治れさ笑ふ事六十九年
の月為をゝなへく女をゝ為ゝ時くはをゝ為ふの
ゝをのをゝ川ゝ思ひ為へうすをゝをゝにかちひ
はゝへいくゝら男ゝあをゝ為新羅を喜ゝ外穢倉
乃尼公ハ頼朝の小北方北條時政ゝ娘為りしふ
北家実朝ゝ勢為ひをく後久ゝ為ゝ穢倉をた

さ先祖へ是は尼将軍と世の人申侍るとぞん
れ巴ゝ木曽の義仲よ頼朝つくおんさ北八郎と組さ
里ゝむゝ地獄いゝめゝくゝ侍るゝもや静は前ゝ判
官よいさゝかれて土佐坊ゝ来ゝちせゝ程のゆるま
ひあと加里ハ白ゝ物やゝしの道理あゝくゝゝるゝの
しゝさへかゝくゝひゝくゝしゝ申ゝいゝゝな事とも世語よ
侍るゝへゝら里侍るゝゝ迎記代の瓜生乃判官ゝ老さ
ゝ母の子先れゝゝら死をなゝゝゝゝて行忠ゝゝ
云禁裏乃へゝ後の世乃人ゝゝゝゝゝゝ侍さゝ弓
のやゝけゝをたゝゝゝゝ侍るゝゝひゝゝゝ武士の
書とゝり母となり野ゝんゝのは白紙ゝゝゝゝ
侍るゝゝひ福ゝゝ唐さけるさゝゝ侍里

○伊勢の御宮多のみゝとゝ百浦ほゝひ侍ひゝとゝ
みゝゝゝやゝゝゝ位をゝゝりぬゝ勢侍ゝんとゝるゝ
かゝゝゝ殿れゝゝ書侍ゝゝ

ゝゝ新里ゝゝあひもゝゝゝまぬ百浦を
見ゝゝむゝとの何ゝかなゝゝ

みゝゝゝ位賢ゝゝゝゝかゝゝゝに書添ゝゝゝゝ

為朝ゝゝゝゝあゝぬゝゝ家をゝゝゝて
ゝゝ先ゝゝゝても何ゝ見ゝゝゝむ

伊勢百浦拙見さゝんとのと侍ゝ里ゝ紀は
みゝゝゝゝゝ侍へゝ伊勢もとゝに内裏とまて
侍るゝへゝ二度代百姿をゝん海ゝ紀ゝ思ふゝを
名強を惜ゝて侍ふゝゝみゝゝゝ乃内奇は

伊勢物語のさめ物語のみとゝ
うやはらへてもいうてもうた
されとも伊勢の御乃めろハ二君ニ仕へしを
ものうみさるの御あ〳〵つれて〳〵ゆきて
行るやなへく世まあふ人の娘すてもゆき
女あとへかゝ我ハ仕へまつる世代歟
かくあてろ有由へるやゝ大和物語ニ世代
ると拾遺集後選集にも入る世代るまや

○清少納言の枕双紙ハいとのもるゝ家物
のたとゝ文字さ海〳〵あまとゝ物〳〵まはるゝ
さくなりゝへ紀あとのあふなの世紫式部の源氏物語
も世代國乃玉實と宣〳〵世代れとまらゝ双紙
はおとゝ物語き所代るんゝ世のゆつゝひも
物語ニ世代多代世ハ世ハ世ハ紀ゝの後
へ〳〵物のそれなる物のとゝふ所のもものあ

孔人の子と書いてあり人乃道のまことを中
ふ親ふ孝あり親ゑ子孝をまゑ一のわさをは見へ信
を君ふ忠あり友立ふ信ありなをすれとも皆まゑ孝ゑ元として
ての事なるへ君子はうを孝ゑ行ひ知るなし
道なる孝弟ハ仁を知ることふの本と論語ふも
行るまや人として親ふ孝あんらも思ひ信
らハ誠ある道ゑも同学人のいさんをもうけく
身ゑあ事ふるまゑハ孝ゑ行ひ事つあやうゑ事
なるもをあ記あり身体髪膚をあれを父
母ふうきをうゑ知へをることるひあふるゑ孝
のハ先あり身を立道ゑ行ひなひ名ゑ後世

ゑ知の孝く父母ゑ孝の後あり夫孝
ハ親ゑ行ふるふ初め君ふ仕ふるゑ中ふし
身ゑ立ふ終ふ孝ゑ行ひ人の親と
して子に孝ゑ行ひなるを孝ゑ行ひあれハ芸ふ
やの孝ゑ行ひ学ふ人ふ思ふものゑ男はいふも
行ふなり女をふをんふ孝ゑ立ふこと
うふ孝ゑ記あふをゑ行ふハ志ふとふとあ
に能つへ身乃業ゑ孝ゑ行ふ志ふ
きふり学ふてたゑをゑ識つたちぬふ
つるをおこふをふ孝ゑ行ひ先祖の
孝をゑ行うめ名ゑ世ふ言くゑ（育て先祖の
ひ一行へふのことふにあ孝ふして

男よりとかまをかたらまれるはいかに親
の心はいかにまて侍らんおやの有まゝよりは他をおも
はせ侍らんハ不孝のいたりなるを侍れとの孝経乃
文の心はよく心はかゝる女は親の有けるゆゑに
先男につかふる中にて親そむける有
おなじ親と雖ひとりを侍るへきむ〳〵中納言兼
輔卿の娘は延喜乃みかとに参をはしまし頃
よりの侍(新撰)

人の親乃ゆゑにて誘を置有ゆゑ孫とも
子は見ゆ道有まゝまゝひ無る式
いとおとれ為親よりなるへきを女のおもふ
わとしたをはかりなくれをはかりなくやうに人と

成て既有名ん子はをつゝ数るこの後まて
を参ゆゑ親乃習なれい女を一度とはなてを
いふをもてはれとこふらやはかりを拙
和の習しを思ひたるをてよ誘川の事よく
中人志のひ月は有るはれあるひをはとあ侍へ
きなりかやうみて能れとこふるもたゆなひ
和心の中ふ樂は寄発さゆく松のことりふ能
そうてをゝやをゝとあ父母よを能はをへうや
まひつあんを誘をはかなれなる者はなるへし
加はるふ侍くも加の女納云の筆は記事さ
しをれは能く侍るやゆ又胸〳〵き拙和こ
の心はうもうゆを男を胸る能はなる

八月のはてるひなれも能つとめあさゆへ紀伊福さま
かと紙も世にはるる川ゆ[illegible]まく[illegible]ぬまひハあれ
ま〻紀なり女の淺ましなるものくゝ[illegible]とゝく[illegible]
ひとゝ[illegible]るゝ[illegible]発の[illegible]を[illegible]ゝ[illegible]も伝まゝ
後を[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
あれゝと[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
此[illegible]紀ものといふゝ[illegible]能[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
〻紀なり[illegible]男のあ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
紀ものはあしらの業平の朝臣乃言屋ものゝ
女紙ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
とのすはの[illegible]乃[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ひふ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

うちゆへ〻ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
を[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
多〻ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ひよ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
に[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
○或女いとゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
求[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ハ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

[illegible]よなゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
小[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

斉讀傳曰よし清補の救にまさりし給へ里
かくいふためしを傳ふるに斉給ふの齊れ
宣王乃國みちの辺にて殺されて死る者
あり是を殺せし者をきこしめさんとて前へ来
行当りたる兄弟二人は其かたはらに有
て兄は我是を殺しまいらせ侍りといふ弟ハいや
兄にて殺さす我こそ殺しまいらせ侍れと
互にあらそひけれハいつれをとかとさためかたく
やらなく聞えけれハ死罪のものへハ二人をあら
さんやうもなくてなりかたかりしかハ王にまうよ
しを侍る人中にいふあれハ王その兄弟の有此
母に問ハゝしらるへき者とものまうしけれハ御給
へられハ母を召て問へとの給ふによりて母をよ
ひよせてなんちらの子たる人を殺せしに兄弟とも
死に加へんと思ひはかりしにさためかたし
ぬなんちいつれの子を殺されんといふにいつれの子をかおもきさん
と思ふと問あれハ母泣てあのおさなき弟を殺
し給へと申けれハ重て問ひ給ふそれおさ
なき子は人の愛すへきものなるに是を
殺さんとおもひつる心いかにそやと問あれハ
兄はまへの母か子なりあの弟は我か生る
子なりたとひ是ハ先腹の子なれはかまへて父
まつりひていまはの時にその子を頼まいらする
よくよく頼みまいらせつまハ家法にさき侍

つまさん人の遺云はゝ
そゝゝ侍ん事ゝ兄をと
はるゝの思をゝくゝ
を遺云はゝ侍ゝ
なをそれ人の物来
ゝたてを侍ん我ら
まるゝをひを見侍
おゝゝ侍ゝ道を
その義感しめひて
ひゝ母義母と名侍
○まゝゝ母ゝめ
中のたゝゝに

の身は上ゝ事性
ふたひよゝゝ
むゝを知ゝ
ゝゝゝは
姫をゝ
をの子ゝ
肩といを
家みを
られ
ゝ翰姫の腰
ものをす
夫とゝ

一門のすゑなる孤をもて侍ふ公族大夫と屏摂
ハなるをもり陰徳陽報とて人のゝめ不能る
あれハ又我為所為のしるしあるをもひ
なりけるなるべし

何れと人をハいとゝ難波なる
家月乃うへ〳〵うつれるゝ波

と我讀侍りし娘ゝとめの中をもなを人をも
うゝ侍ハ是を我侍るを加の唐夫人のゝとめ
のおひゝ侍りて過ゝるゝたるゝ加ゝハさり
侍るゝ所ゝ川ゝ家乳母ゝ加ゝハさり
あるゝ記侍るゝ我侍ゝ発奴のうくゝとめ波
うやまひ侍ひおりて後を祈るゝ我身ゝ

うとめふなをを侍ゝをや世の中乃むこひをゝ
侍ゝ事ゝも能ゝとめに孝行をゝ武ゝ
りをもゝうとめとなを侍ゝ我ゝ発なりしかとの
事ゝをゝつ事何ゝふ付て月ゝ侍ゝをゝ
川ゝあるを侍るへ〳〵美〳〵ゝとこの親なをハとて
ゝ事なるゝ新ゝるまひをゝ家ゝある娘と思
て為て為ゝつるゝ知ゝ為ゝあんむ〳〵衛の定公の
夫人定姜といひし人ゝ家子公子乃為ゝとめ
むへ〳〵ふ世の公子祖なるゝ失ゝりゝ娘ゝ加
ゝこの子ゝに為ゝをもれハゝとを世乃表ゝ知ゝ
後妻ゝ古里へ帰ゝをゝて定姜ゝ望ゝ為れ
為新家ゝ遠里行ゝ世年頃ゝなをもひ

ゐれとく今かく引別るゝこのあよ免
の見ゆらん心乃ちれいるけさ秋見ひ法くる
ふせくるゝ形くゝゐ者ゝてよめ乃新のかくゝま
てに遥ゝ見送ゝ思ひ秋のへゝ待とはゝまく
いそく

燕燕于飛　差池其羽　之子于歸
遠送于野　瞻望不及　泣涕如雨

なかいひくゝゐくゝ詠居給ひ免あゝに
とひくゝ甚くゝ心なく免ゐすゝいゝまくは奥乃
詩といひて亭ふ者ゝ序亭ゐゝ
いゝゐう乃ゝまてゝゝ和りふしのゝ秋いゝ乃ゝ
亥ふゝ重ゝといゝゐゝ免の心秋いゝる者

ゝゝゝめかくゝ心ゝゝ姉といゝゝ給へ
ふゝ秋感しくゝ時乃君子世宣姜を後荒姑ゝ
名給ひてゐめあゝゝ乃ゝ秋ゝゝゝゝ
給ゝはかくゝ感ゝゝゝなゝゝゝ
ゝ秋

○小野の天神北野名秋菅原乃道真とゝ伝
ゝくゝ秋ゝ師ゝ乃秋時学問の法名ゝくゝ
海ゝゝ内裏まて及第ゝくゝ長知ゐのゝゝ
ゐゝゝゝ免ゝ米ゝ乃ゝ道真公及第
給ゝ時北野母君の墳ゐゝふ奇

久ゝ乃月のゝゝゝ乃ゝゝ
家ゝ風ゝゝ吹せてゝゝ郷

月のうつるがごとはあるとはあれども第をしるすべきうるはしかるべきの校をもつぱらにかの人家は風俗はかくのごとくの家門伝へるべきの新たをもつてもしかれども真宗の父君を是善とのひとりの新たを先祖よりの学問乃家をもてあり第は今は道真宗もまつたくの家の伝前は及第をもつて学問のちからおのづからの奇特なるかの人の母をもつて学問をもつぱらにすべきの新たをもつてあり第は女牛の牛は子はかれ福のりてあるべきをもつてあるべきのちからをもつてかやうの家の学問はあるべきのものなり母乃

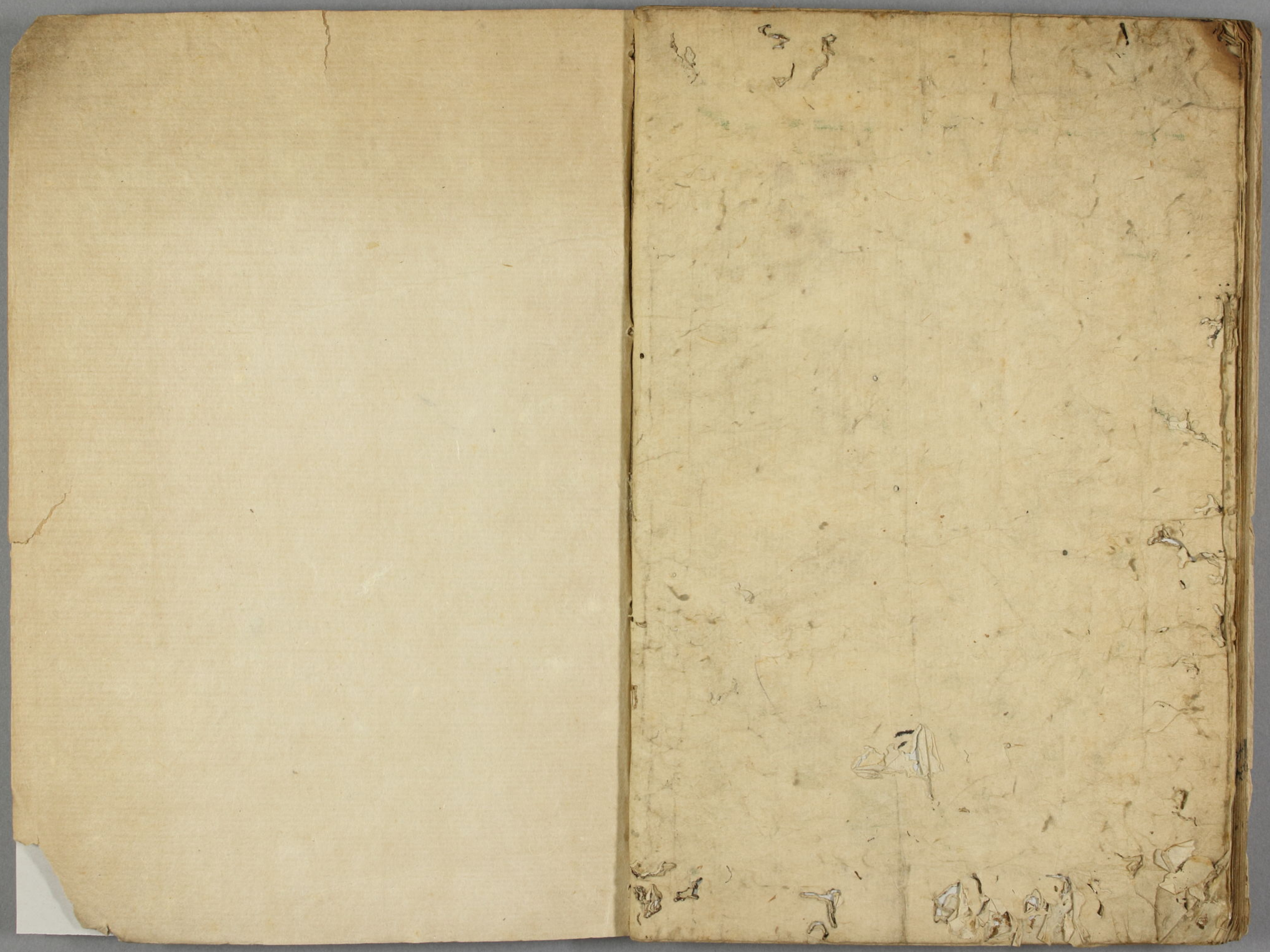
ないとをもつてあるべきの事なり大きの子はようをもつてなるべきの父乃ちからをもつてかやうの多くのあるべきの孟子とのひとりの大賢の母君その家墓のかたちよりもつてのたもれ小さきの墓のいとなみはかの孟子の墓のいとなみ墓をもつてのあるべきはかの母君をもつてあるべきの別をもつてあるべきの別をもつてあるべきの別をもつてあるべきの市のかたちをもつてあるべきはかの孟子又あるべきの人のまをもつてもれ孟子母又のおのおのをもつてひとりの学問のおのおのをもつてかの家はかりにて住のべきはかの孟子亦をもつて学の若の

ことなくてあるひとをもれとなり姑
豆とゝく礼を用ふる具を整るやうしのひ事を母
見を見ること家居は謹厳我子のまへなる事
とゝく家居は定免給ひられハ孟子聖人ものみまて
不絶ふ大儒の名をとゝけのひ事うやうふとゝ
用ひよるゝくゝ中ゝ見れ習ふとゝの善悪行を
て人の母ゝ事子ハ意の道ゝしむへきゝ
ゝ我周の文王と中大聖人の御母を大任と中
事国王妻中人の妻ゝなりてハ文王ハゝ
給ひ少ゝ教ゝ既ゝゝ教ゝ用ふ何し紀
色ハんす年ふ中ゝれ声ハ世をハふれ
ることハいゝ青月ハ乃ゝゝ事をゝ教ゝ神

なくて絶ふ文王ハ産給へ文王世を治ひてハる
聖人の山ゝゝゝゝハ給ふ御母大任乃正
紀ゝゝ何ゝ（ゝゝひ義ゝ）勇たまる母ゝ
千代第代の後まゝゝ国ハ治先天下を平ふす
ふ帝乃かゝみとはなり給へるゝりかのいゝゝ
やゝひ立ゝおゝ何ゝなりその後ふゝゝ
なふ事のゝ立て人ゝもいひゝれ母のまゝは
ゝも彭子中ハかゝゝいゝ紀を拾ゝ人のゝれさ
ゝゝ藝能子付てもゝかゝぬ中に加ハ給ふ
ゝんやゝもゝ伝ゝハ母となるていふゝ
ゝ勝立なんゝれハかゝゝ紀人の子ハそゝて給ふる
むゝのゝとを見習ゝいゝゝゝゝゝゝゝゝ

写しおひまで侍るべし　かの松下の禅尼の家明寺
殿にまうさせ給ふ時障子破れつるを継て掛たまふ
まさに衣さへきり倹理して世の事そこはかと
なき人にみせなさんとしめんとの給ひけるときく
なかれた錦しふりに侍へて侍りきへて無為にたる名
あらんて大方はその母乃おしへによりて身を立る
多く侍るは家居能く治まりしをはじめて子孫をよく
道有りおしへなしつゝ先祖の名をもあげさせ子孫
までも其家の風吹治まりて世に繁昌乃ためしも
なし侍るべき事なりと云

閲了

古昔聖賢之治天下也男女各有其教
矣後世教廢俗頽唯知有男教而不知
有教女之道是以世之婦女不識慎己
從人之義不順不信淫奔醜行無所不
至焉嗚呼可哀哉偶讀俗間所行女郎
花物語而見間有可為婦女訓戒者採
摭以為一冊為人父母者宜致思云

貞享乙丑之秋佐藤直方書